

# 月刊ウィーン

Monatsmagazin Japanisch  
現地オリジナル取材と編集で  
ウィーンを伝える月刊情報紙  
創刊平成元年 創刊30年目 **Nr. 344**  
**GEKKAN-WIEN 2018年4月号**



Egon Schiele, The Hermits, 1912 © Leopold Museum, Vienna, Inv. 466 レオポルト美術館「エゴン・シーレ」没後百年記念特別展にて展示中 本誌7頁参照



# 杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 77

筆者が勤務する東京工業大学グローバル原子力安全・セキュリティ・エージェンツ教育院は、文部科学省の支援によりグローバル原子力危機の分野において、国際的リーダーとして活躍する人材を育成することを目的とした修士・博士課程一貫の学位取得プログラムを実施している。本教育院の活動の二環として、国内外において実習・研修を行うっており、二月十二日〜十三日には米国研修を実施した。参加学生は、博士課程二年の学生三名（中国出身）、同二年の学生二名（フィリピン、南アフリカ出身各二名）、修士課程一年の学生三名（日本人二名、マレーシア出身二名）、修士課程一年の学生二名（日本人）の計七名。院長と筆者らスタッフ四名が引率者として同行した。訪問先は、ニューヨーク、ワシントンDC、テキサス、ネバダ、カリフォルニアの大学、国際機関、博物館、大使館などである。



<http://www.dojo.titech.ac.jp/>

ニューヨークでは国際連合本部と九二記念博物館を訪問した。九二記念博物館では学生達は改めてテロの恐ろしさや悲惨さを感じたようだ。ワシントンDCでは、在米日本大使館と世界銀行を訪問した。テキサスA&M大学のディザスターシティでは、地震発生による工業団地内の放射線源事故を想定して放射線物質を

回収する実習を行うとともに、学生同士が事前に連絡を取り合いテーマを決め、グループ討論を行った。ネバダでは国立核実験博物館を訪問した。学生達は国内研修で広島と長崎の原爆博物館を覗いているので、原爆に対する考え方が日米で大きく異なることがよく理解できたのではないかと思う。カリフォルニア大学バークレイ校では、筆者より東京電力福島第二原子力発電所の廃炉に関する講義を行うとともに、先方の学生と同発電所をテーマとしたグループ討論を行った。グループ討論では、双方とも最初は緊張していたが、討論結果の発表が終わる頃にはすっきり打ち解け、学生同士の新たなつながりが芽生えた。（本文、写真とも写真中に記載のURLより）

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市のソフトボール事情について述べてみたい。ウィーンでは、一九七〇年代初頭、国際原子力機関勤務の日本人職員と日本大使館職員が中心となってドナウ川岸でソフトボールを行ったのが初めらしい。欧州では珍しいスポーツを市民が橋の上から鈴なりになって眺めていたと伝えられる。その後、オーストリア日本人会主催のソフトボール大会が毎年春秋にプラター公園内の球場で開催され、日曜朝から二百名以上が集まる日本

人社会最大のイベントとなった。併行して地元ウィーンや米国、韓国、カリブ諸国などのチームも出て、二〇〇六年からは各国の代表による国際ソフトボール大会が開催されるようになった。

れた六四校の小学校を起源とする学区に基づいたチームで青壮年から七〇才以上の高齢者もソフトボールを楽しんでいる。一般向けには御所の球場が手軽に利用できる。軟式野球と共用であるが、富小路広場に六面、今出川広場に三面ある。隣り合う試合で外野の守備が錯綜するのが草球場らしい。京都府は全国でもソフトボール強豪校が集まる地域であり、例えば、京都明德高等学校は、全国高等学校総合体育大会ソフトボール競技大会と全国私立高等学校ソフトボール選抜大会はともに優勝の経験がある。両市では、老若男女がソフトボールを楽しんでいるのが共通している。



ドナウ公園でよく練習し、二〇〇五年秋の日本人会主催の大会では初優勝した。〇六年の第一回国際ソフトボール大会では、チームジャパンの監督兼選手として、全八チームによるリーグ戦とトーナメントを制し運良く優勝した。京都では学区のチームに所属するとともに、京大では専攻の学生と教職員によるソフトボール大会を復活させた。両市のソフトボール事情を紹介できた幸運に感謝しつつ、国際ソフトボール大会で優勝した時の写真を掲載させていたたく。

余談であるが、著者はウィーン滞在中、GOT（グレートおじさんチーム）に所属してドナウ公園

■ 杉本純 前京都大学教授  
元原子力機構ウィーン事務所長 ■